

# 「社会人基礎力」の形成と 就職活動に対する課外活動の意義

ーチームワーク要求型授業との比較からー

秋元 政則（東京大学教育学部）

## ■要約

- ◎本稿では就職活動に際し「注力エピソード」として用いられる課外活動が、実際に「社会人基礎力」の形成に関係があるのか、そして就職活動結果に対して本当に個人個人の「社会人基礎力」が影響しているのだろうかという点についてチームワーク要求型授業との比較を用いながら検証していく。
- ◎課外活動へ参加している学生、そして参加時間が長い学生の方が、チームワーク要求型授業などについて統制しても、社会人基礎力スコアが有意に高かった。また、内定の獲得に関しても前述したような学生の方が、内定を獲得している割合が高かった。
- ◎特に大学入試難易度 $\beta$ グループにおいて、課外活動への積極的な参加が就職活動の助けとなると考えられる。

## 1 問題設定

近年、エントリーシートや面接といった企業の大卒者採用場面において、企業側が学生に対し学生時代に特に熱心に取り組んだこと、そしてそこでの経験や行動から何を得たのかといったことを聞くことが半ば定番となっている。小山(2010)はこういった能力評価のあり方を「注力エピソード」という概念で捉え、企業は特定の「注力エピソード」の内容を直接的な評価項目としているのではなく、「注力エピソード」を1つの代理指標として学生の能力評価を行っている指摘している。単に能力と言っても様々なものが想定できるが、ここでの「能力」とは、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」に代表されるような、コミュニケーション能力や課題発見力などが想定される。

ここで、企業がそうした評価を行うにあたっては「何かに積極的に取り組み、経験した学生は能力が高い」という前提が想定される。しかし、果たして「何かに積極的に取り組み、経験した学生は能力が高い」と本当にいえるのだろうか。そして、実際そうした取り組みを通して形成された「能力」の高い学生は就職活動において結果を残しているのだろうか。ここではそうした問題意識から、学生が大学生活の中で経験するであろう取り組みの中でチームワークという観点を導入し、部・サークル・学生団体などの課外活動と大学教育の比較を通して検証していく。

ここでチームワークという観点を導入するのは、社会人基礎力などで挙げられる能力の一角としてチームで物事を行う場合に求められる能力があるためである。そして、学生がそうした

チームワークを求められる場面として部・サークル・学生団体の活動を中心としながら、そうした課外活動に対する軸として同様の大学内の活動の中でも正課の授業であるチームワークを要求されるような授業を取り上げる。大学生活においてチームワークを求められる例としては課外活動以外にもアルバイトなども想定されるが、ここではあくまで大学という枠組みの中での取り組みに焦点化することで、大学側の学生に対する支援に関する提言といったものも視野にいれながら論じるために課外活動に注目する。

また、チームワークを要求するような授業として、ここでは「他人と協力して研究や作業を進める授業」を「チームワーク要求型授業」とみなして分析を行う。質問用紙における「少人数での議論・討論を行う授業」もチームワークを要求する授業として想定できるが、前者の方がより包括的な概念として使用できると考えられるためである。また、そうした分析とともに多変量解析を用いて大学入試難易度別の分析もあわせてみていく。これは、大学入試難易度によって、学生側の授業および課外活動への参加の形態や、大学側の両者へ取り組み方の違いなどがあると考えられるためである。

以上のような理由から本稿では課外活動への参加と、授業への参加による「能力」の形成、そして就職活動結果への影響について比較し、課外活動の意義について検証していく。

なお、ここでは就職活動について分析を行うため、分析対象を4年生に限定して行っている（留学生は除外）。以下では上記のような「能力」を経済産業省の提唱する「社会人基礎力」に読み替えて分析を行っていく。「社会人基礎力」とは「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、企業側が採用場面において学生に期待する能力であるとされる。

## 2 先行研究の検討

本稿のテーマに関する先行研究として濱中（1998）がある。濱中は学生自身の能力自己評価に関して4件法で学生に質問を行った調査結果を用い、9つの能力項目を因子分析によって3つの因子に分けて分析している。この3つの因子を従属変数として、大学偏差値、大学の成績、サークル所属、大学外学習機関の利用、女性ダミーを独立変数とした分析では、女性ダミー以外の変数で特定の因子と有意な相関関係があることが示されている。また、各要因が内定先企業規模の規定要因となるかを分析しており、4年生の4月から5月上旬にかけて大企業を希望していたか、大企業以外を希望していたかについて統制した場合に限り、各能力で有意な相関関係が示されている。本稿ではこうした能力を媒介とした就職活動結果の分析を参考としつつも、単純な大学成績ではなくチームワーク要求型授業への参加と課外活動への参加の比較から検討していく。

また、大学生の就職活動のプロセスと大学就職・キャリア形成支援がそれに及ぼす影響に関する研究として小杉（2008）がある。小杉は大学の選抜性による就職活動プロセスの違いや、大学の就職支援・キャリア形成支援の活用度の違い、そしてそうした違いを踏まえた各大学の対応策について検討している。小杉の分析では、就職活動に対する学生の自己評点に関し、部・サークル活動などの課外活動は有意な影響はみられなかったが、本稿で用いる能力を媒介とした就職活動結果への検討を行うことで、改めて課外活動の意義を確認することができると考えられる。またそうした分析を通して、小杉の提唱するOB・OG名簿の整理や紹介、就職手帳

などのツール作成といった大学側の対応策に含まれていない、課外活動の奨励といったことも新たに示すことができるのではないかと考えられる。

サークル活動と就職活動結果に関連した先行研究としては梅崎（2004）がある。梅崎は主にOBネットワークを利用した学生の就職について分析しており、その中でサークルのOBを介した効果について検証している。その結果、サークルOBの利用に関して、スポーツ系サークルの所属者に限っては第1志望の企業に就職する可能性が高いということについて確認している。しかし、梅崎はOBネットワークの利用を中心に分析を行ったためサークル自体の効果と就職経路の間の「ズレ」については詳細な分析は行わず、以下の解釈の可能性のみに留めている。第1の解釈としては、スポーツ系サークルの活動自体を人的投資の機会として考えると、サークル活動で培った勉学以外の能力、例えばリーダーシップなどが企業に評価されるため、就職に成功しやすいのではないかとということ。第2の解釈として、OBネットワークの直接利用の効果は無くとも、ある程度の情報提供など間接的な利用による効果があるのではないかとということである。本稿における調査分析では、特に第1の解釈の点について明らかにしていくことができると考えられる。

### 3 仮説

理論仮説1、理論仮説2では課外活動と「社会人基礎力」の相関関係をみる。ここでは課外活動への参加、そして参加している学生の中でも部・サークル活動への参加時間の長短が「社会人基礎力」の形成に影響を与えるのかについて検証する。なお、変数の関係上、課外活動参加度については学生団体等が含まれているが、活動への参加時間には学生団体等は含まれていない。これは、基本的な方針として課外活動全体を対象とするものの、質問項目において部・サークル活動に限って参加時間を聞いているためである。

●理論仮説1：課外活動へ参加している学生ほど、「社会人基礎力」が高い。

○作業仮説1：課外活動に参加している学生の方が、参加していない学生よりも社会人基礎力スコアが高い。

●理論仮説2：部・サークル活動への参加時間が長い学生ほど、「社会人基礎力」が高い。

○作業仮説2：部・サークル活動に参加している時間の長い学生の方が、参加している時間の短い学生よりも社会人基礎力スコアが高い。

理論仮説3では、チームワーク要求型授業と「社会人基礎力」の相関関係について検証する。これは大学教育におけるチームワーク要求型授業を受けた学生ほど、集団での研究や作業の中でのコミュニケーションなどを通して、「社会人基礎力」が高まると考えられるが、実際に両者の間に関係があるのかを検証するためである。

●理論仮説3：大学教育においてチームワーク要求型授業を受けた学生の方ほど、「社会人基礎力」が高い。

○作業仮説3：大学教育において他人と協力して研究や作業を進める授業を受けた学生の方が、

受けていない学生よりも社会人基礎力スコアが高い。

理論仮説 4 では、チームワーク要求型授業や性別などの基本的な属性を統制した上であっても、課外活動への参加や、参加時間の長さが、「社会人基礎力」と有意に相関関係があるのかについて検証する。これは「社会人基礎力」の形成における、課外活動の意義について比較しながら検証するためである。

- 理論仮説 4：チームワーク要求型授業や基本的な属性について統制した上であっても、課外活動へ参加もしくは部・サークル活動への参加時間が長い学生ほど、「社会人基礎力」が高い。
- 作業仮説 4：他人と協力して研究や作業を進める授業を受けたか否かや、基本的な属性の違いにかかわらず、課外活動へ参加もしくは部・サークル活動への参加時間が長い学生ほど社会人基礎力スコアが高い。

理論仮説 5、理論仮説 6 では課外活動と内定の直接的な相関関係をみる。ここでは課外活動への参加、そして参加している学生の中でも部・サークル活動への参加時間の長短が内定獲得の有無に影響を与えるのかについて検証する。

- 理論仮説 5：課外活動へ参加している学生ほど、就職活動結果がよい。
- 作業仮説 5：課外活動に参加している学生の方が、参加していない学生よりも内定を獲得しやすい。
- 理論仮説 6：課外活動への参加時間が長いほど、就職活動結果がよい。
- 作業仮説 6：1週間あたりの部・サークル活動の課外活動参加時間が長い学生の方が、参加時間が短い学生よりも内定を獲得しやすい。

理論仮説 7 では、チームワーク要求型授業と内定の直接的な相関関係について検証する。これは大学教育におけるチームワーク要求型授業を受けた学生ほど、「社会人基礎力」が高まり、内定が獲得しやすくなると考えられるためである。

- 理論仮説 7：大学教育においてチームワーク要求型授業を受けた学生の方ほど、内定を獲得しやすい。
- 作業仮説 7：大学教育において他人と協力して研究や作業を進める授業を受けた学生の方が、受けていない学生よりも内定を獲得しやすい。

理論仮説 8 では、結局のところ就職活動において「社会人基礎力」が高い学生ほど、内定が獲得しやすくなるのかを検証する。

- 理論仮説 8：社会人基礎力が高い学生ほど就職活動の結果がよい。
- 作業仮説 8：社会人基礎力スコアが高いほど、内定を獲得しやすい。

## 4 変数の設定

- ①課外活動参加度：Q14「半年以上参加している（していた）部・サークル活動・学生団体」を用いた。クロス集計では、「参加していない」の非該当者を「参加」、該当者を「不参加」とした。多変量解析では前者を1、後者を0としてダミー変数を作成した。
- ②課外活動参加時間：Q23E「(1週間の平均的な生活時間)部・サークル活動」を用いた。「1時間未満」を「1時間未満」、「1~5時間くらい」から「26時間以上」までを「1時間以上」に割りあてて用いた。多変量解析では「1時間未満」を0、「1~5時間くらい」を3、「6~10時間くらい」を8、「11~15時間くらい」を13、「16~20時間くらい」を18、「21~25時間くらい」を23、「26時間以上」を28とし、連続変数として用いた。
- ③社会人基礎力スコア：経済産業省の提唱する社会人基礎力を参考にしてQ09A「自分の意見を筋道を立てて人に説明する」などのQ09A~Hについて「とてもあてはまる」、「あてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」をそれぞれ1点、2点、3点、4点とし合算して32から引いたものを0~24点のスコア化して用いた。クロス表ではこれを2分割した際にケース数がほぼ均等になるよう、16~24点を「高い」、0~15点を「低い」として設定し用いている。アルファ係数は0.789であった。
- ④大学入試難易度：Q02A・Bを使用して作成した。母集団データにおける学生数ができるだけ均等2分割になるように、入試偏差値54以上の大学をαグループ、53以下の大学をβグループとした。多変量解析では入試偏差値をそのまま連続変数として用いた。
- ⑤内定獲得の有無：Q59G「企業から内(々)定を獲得した」を用いた。1社以上から内定を獲得しているものを「内定あり」、1社も内定を獲得していないものを「内定なし」とした。ロジスティック回帰分析では「内定あり」を1、「内定なし」を0と割りあててダミー変数を作成した。
- ⑥男子ダミー：Q01A「性別」を用いて、「男」を1、「女」を0とするダミー変数を作成した。
- ⑦経済階層：Q47「保護者の年収」を用いた「400万円未満」を3とし、「400万円以上600万円未満」を5、「600万円以上800万円未満」を7、「800万円以上1000万円未満」を9、「1000万円以上1200万円未満」を11、「1200万円以上」を13とした。
- ⑧文化階層：Q54「実家にある本の冊数」を用いた。「ほとんどない」を0、「20冊くらい」を0.2、「50冊くらい」を0.5、「100冊くらい」を1.0、「200冊くらい」を2.0、「300冊くらい」を3.0、「400冊以上」を4.0という形でそれぞれ100冊単位で換算し、連続変数として用いている。
- ⑨成績(A以上の割合)：Q07「A以上の割合」を用いた。多変量解析では、連続変数としてそのまま使用した。
- ⑩チームワーク要求型授業：Q04C「他人と協力して研究や作業を進める授業」を用いた。「たくさん受けた」と「少し受けた」を「受けた」、「受けたことがない」を「受けていない」とし、ロジスティック回帰分析では「受けた」を1、「受けていない」を0と割りあててダミー変数を作成した。

ここで、基本的な事項として大学入試難易度グループと授業、課外活動の関係について確認しておく。大学入試難易度グループを独立変数、チームワーク要求型授業を従属変数としたクロス集計の結果、αグループでは「受けた」が82.4%「受けていない」が17.6%だったのに対



し、Bグループではそれぞれ75.7%、24.3%であり、両者とも80%前後の学生がそうした授業を受けた経験があった。また授業全般への出席状況についてみると、Q04A「毎回出席をとる授業」を従属変数としたクロス集計の結果、αグループでは「たくさん受けた」が32.1%、「少し受けた」が67.2%だったのに対し、Bグループではそれぞれ57.3%、42.7%であった。さらに、「課外活動参加度」を従属変数としたクロス集計の結果、大学入試難易度αグループでは「参加」が81.0%、「不参加」が19.0%だったのに対し、Bグループではそれぞれ50.9%、49.1%であった。

こうした差異の原因としてBグループでは大学側が学生出席を取る授業を増やし、学生を授業に來させようとしている可能性が考えられる。また、それに伴ってBグループではαグループに比べ課外活動への加入率が低くなっているのではないかと考えられる。

## 5 分析

### 5.1 作業仮説1の検証：課外活動参加度と社会人基礎力スコアの関連

まず、作業仮説1を検証する。表1は、課外活動参加度を独立変数、社会人基礎力スコアを従属変数としたクロス集計の結果をまとめたものである。それによれば、活動に参加していない学生よりも、参加している学生の方が社会人基礎力スコアが高いということがわかる。この差は1%水準で有意である。以上から作業仮説1が支持されたといえる。

表1 課外活動参加度×社会人基礎力スコア

課外活動参加度	社会人基礎力スコア		合計	N
	高い	低い		
参加 (%)	50.5	49.5	100.0	(412)
不参加 (%)	37.0	63.0	100.0	(235)
合計 (%)	45.6	54.5	100.0	(647)

Q14×Q09A~H  
1%水準で有意 p=0.001

### 5.2 作業仮説2の検証：1週間あたりの課外活動参加時間と社会人基礎力の関連

次に、作業仮説2を検証する。表2は、1週間あたりの課外活動参加時間を独立変数、社会人基礎力スコアを従属変数としたクロス集計の結果をまとめたものである。それによれば、活動への参加が週1時間未満の学生よりも、週1時間以上の学生の方が社会人基礎力スコアが高いということがわかる。この差は0.1%水準で有意である。以上から作業仮説2が支持されたといえる。

表2 課外活動参加時間×社会人基礎力スコア

課外活動参加時間	社会人基礎力スコア		合計	N
	高い	低い		
1時間以上 (%)	53.8	46.2	100.0	(266)
1時間未満 (%)	39.5	60.5	100.0	(370)
合計 (%)	45.4	54.6	100.0	(636)

Q23E×Q09A~H  
0.1%水準で有意 p=0.001

### 5.3 作業仮説3の検証：チームワーク要求型授業と社会人基礎力スコアの関連

次に、作業仮説3を検証する。表3はチームワーク要求型授業を独立変数、社会人基礎力スコアを従属変数としたクロス集計の結果である。これから、チームワーク要求型授業を受けた学生の方が、受けていない学生よりも社会人基礎力スコアが高いということがわかる。この差は1%水準で有意であり、以上から作業仮説3が支持されたといえる。

表3 チームワーク要求型授業×社会人基礎力スコア

チームワーク 要求型授業	社会人基礎力スコア		合計	N
	高い	低い		
受けた (%)	49.1	50.9	100.0	(501)
受けていない (%)	35.8	64.2	100.0	(137)
合計 (%)	46.2	53.8	100.0	(638)

1%水準で有意 p=0.006

### 5.4 作業仮説4の検証：チームワーク要求型授業や基本属性を統制した上でも、課外活動は有意に社会人基礎力スコアと関連があるか

次に、作業仮説4を検証する。表4は全体、大学入試難易度αグループ、βグループについてチームワーク要求型授業と課外活動参加度、課外活動参加時間を大学入試難易度や基本的な属性で統制した結果である。それによれば、全体では大学入試難易度、成績、課外活動参加度ダミー、課外活動参加時間で正の相関がみられた。またαグループでは課外活動参加時間が、βグループでは男子ダミー、成績、課外活動参加度ダミーにおいて正の相関がみられた。この結果からチームワーク要求型授業や基本属性を統制した上であっても、課外活動への参加、部・サークル活動への参加時間は社会人基礎力スコアの規定要因となっていることがわかった。

αグループとβグループの差異に関しては、元々αグループは相対的にある程度社会人基礎力スコアが高い学生が多く、大学の成績や課外活動への参加だけではあまり社会人基礎力スコアに差異が出ないためではないかと考えられる。

表4 社会人基礎力の規定要因（重回帰分析）

独立変数	全体		大学入試難易度 αグループ		大学入試難易度 βグループ				
	偏回帰 係数	標準化 編回帰 係数	偏回帰 係数	標準化 編回帰 係数	偏回帰 係数	標準化 編回帰 係数			
大学入試難易度	0.031	0.096	+	-0.016	-0.034	*	0.119	0.121	*
男子ダミー	0.444	0.053		-0.115	-0.016		1.028	0.109	+
成績	0.344	0.213	***	0.174	0.105		0.465	0.292	***
経済階層	0.068	0.054		0.086	0.076		0.077	0.054	
文化階層	-0.096	-0.040		0.104	0.045		-0.218	-0.088	+
チームワーク要求型授業ダミー	0.576	0.064		0.888	0.095		0.363	0.041	
課外活動参加度ダミー	0.686	0.089	*	0.492	0.053		0.831	0.109	+
課外活動参加時間 (定数)	0.069	0.116	**	0.091	0.190	**	0.044	0.059	
	10.580		***	13.816		***	5.885		***
決定係数	0.095			0.077			0.119		
調整済み決定係数	0.082			0.046			0.097		
モデル適合度	p=0.000			p=0.000			p=0.000		
N	581			247			334		

注：+：p<0.10、\*：p<0.05、\*\*：p<0.01、\*\*\*：p<0.001。

また、チームワーク要求型授業に関してはクロス表とは異なり有意な差がみられなかった。これに関して、チームワーク要求型授業を受けたか否かと社会人基礎力スコアの相関が擬似相関であることが考えられる。

### 5.5 作業仮説5の検証：課外活動参加度と就職活動結果の関連

次に、作業仮説5を検証する。表5では、課外活動参加度を独立変数、内定獲得の有無を従属変数としたクロス表である。それによれば、課外活動に参加している学生の方が、課外活動に参加していない学生よりも内定を獲得している割合が高いことがわかる。この差は0.1%水準で有意である。以上から作業仮説5が支持されたといえる。

表5 課外活動参加度×内定獲得の有無

課外活動参加度	内定獲得の有無		合計	N
	あり	なし		
参加 (%)	67.9	32.1	100.0	(377)
不参加 (%)	40.0	60.0	100.0	(210)
合計 (%)	57.9	42.1	100.0	(587)

Q14×Q59G  
0.1%水準で有意 p=0.000

### 5.6 作業仮説6の検証：課外活動参加時間と就職活動結果の関連

次に、作業仮説6を検証する。表6では、1週間あたりの課外活動参加時間を独立変数、内定獲得の有無を従属変数としたクロス表である。それによれば、課外活動参加時間の長い学生の方が、課外活動参加時間の短い学生よりも内定を獲得している割合が高いことがわかる。この差は0.1%水準で有意である。以上から作業仮説6が支持されたといえる。

表6 課外活動参加時間×内定獲得の有無

課外活動参加時間	内定獲得の有無		合計	N
	あり	なし		
1時間以上 (%)	69.4	30.6	100.0	(242)
1時間未満 (%)	50.4	49.6	100.0	(337)
合計 (%)	58.4	41.6	100.0	(579)

Q23E×Q59G  
0.1%水準で有意 p=0.000

### 5.7 作業仮説7の検証：チームワーク要求型授業と就職活動結果の関連

次に、作業仮説7を検証する。表7は、チームワーク要求型授業を独立変数、内定獲得の有無を従属変数としたクロス集計の結果をまとめたものである。それによれば、チームワーク要求型授業を受けた学生と、受けていない学生とでは内定の獲得に関して、10%水準では有意差がみられるが、5%水準では有意な相関がみられなかった。これについては結論で触れることにする。

表8は、全体、大学入試難易度αグループ、βグループについてチームワーク要求型授業と課外活動参加度、課外活動参加時間を大学入試難易度や基本的な属性を独立変数とし、内定獲得の有無を従属変数としてロジスティック回帰分析を行ったものである。それによれば、課外活動参加度と課外活動参加時間について全体、βグループについて有意な差がみられたものの、



表 7 チームワーク要求型授業×内定獲得の有無

チームワーク要求型 授業	内定獲得の有無		合計	N
	あり	なし		
	受けた (%)	59.7		
受けていない (%)	50.8	49.2	100.0	(122)
合計 (%)	57.8	42.2	100.0	(581)

10%水準で有意 p=0.078

表 8 内定獲得の有無の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	全体		大学入試難易度 αグループ		大学入試難易度 βグループ	
	偏回帰 係数	オッズ 比	偏回帰 係数	オッズ 比	偏回帰 係数	オッズ 比
	大学入試難易度	0.480	1.049 ***	0.059	1.061 *	0.003
男子ダミー	-0.547	0.579 *	-0.970	0.379 *	-0.281	0.755
成績	0.210	1.234 ***	0.295	1.343 **	0.181	1.198 **
経済階層	0.067	1.069 +	0.062	1.064	0.057	1.059
文化階層	-0.015	0.985	-0.002	0.998	-0.025	0.975
チームワーク要求型授 業ダミー	0.007	1.008	-0.475	0.622	0.249	1.282
課外活動参加度ダミー	0.599	1.820 **	0.386	1.471	0.617	1.854 *
課外活動参加時間 (定数)	0.044	1.045 *	0.045	1.046	0.046	1.047 +
	-3.488	0.031 ***	1.698	0.030 *	-1.694	0.184
Nagelkerke 決定係数	0.237		0.194		0.139	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000		p=0.000	
N	541		231		310	

注：+：p<0.10、\*：p<0.05、\*\*：p<0.01、\*\*\*：p<0.001。

αグループでは有意な差は見られなかった。また、チームワーク要求型授業はいずれの分析においても有意な差が見られなかった。βグループではチームワーク要求型授業や基本属性を統制した上であっても、課外活動参加度、課外活動参加時間は内定獲得の有無の規定要因となっていることがわかった。

## 5.8 作業仮説 8 の検証：社会人基礎力と就職活動結果の関連

次に、作業仮説 8 を検証する。表 9 は、社会人基礎力スコアを独立変数、内定の有無を従属変数としたクロス表である。それによれば、社会人基礎力スコアの高い学生の方が、社会人基礎力スコアの低い学生よりも内定を獲得している割合が高いことがわかる。この差は 0.1%水準で有意である。以上から作業仮説 8 が支持されたといえる。

また、表 10 のモデル 1 は社会人基礎力スコアが従属変数である内定獲得の有無に対して及ぼす影響の強さを、大学入試難易度、性別、成績、経済階層、文化階層といった独立変数を投入した上で分析したロジスティック回帰分析である。これによれば、他の変数を統制した場合であっても、社会人基礎力スコアが内定獲得の有無の規定要因となっているといえる。また、大学入試難易度、男子ダミー、成績、経済階層についても有意差がみられる。

次にモデル 1 にチームワーク要求型授業を投入したモデル 2 であっても社会人基礎力は有意な規定要因となっている一方で、チームワーク要求型授業に有意差はみられない。チームワーク要求型授業は内定獲得の直接的な要因とはなっていないようである。

表9 社会人基礎力スコア×内定獲得の有無

社会人基礎力スコア	内定獲得の有無		合計	N
	あり	なし		
高い (%)	69.3	30.7	100.0	(267)
低い (%)	48.2	51.3	100.0	(316)
合計 (%)	58.1	41.9	100.0	(583)

0.1%水準で有意 p=0.000

表10 内定獲得の有無の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	モデル1			モデル2			モデル3		
	偏回帰 係数	オッズ 比		偏回帰 係数	オッズ 比		偏回帰 係数	オッズ 比	
大学入試難易度	0.055	1.057	***	0.056	1.058	***	0.045	1.046	***
男子ダミー	-0.538	0.584	*	-0.519	0.595	*	-0.588	0.556	*
成績	0.172	1.187	***	0.173	1.189	***	0.175	1.192	***
経済階層	0.079	1.083	*	0.083	1.086	*	0.063	1.065	+
文化階層	0.016	1.016		0.009	1.009		0.002	1.002	
社会人基礎力スコア	0.109	1.115	***	0.111	1.117	***	0.094	1.099	**
チームワーク要求型授 業ダミー				-0.104	.901		-0.027	0.973	
課外活動参加度ダミー							0.527	1.694	*
課外活動参加時間 (定数)							0.041	1.042	*
	-5.012	0.007	***	-5.051	.006	***	-4.524	0.011	***
Nagelkerke 決定係数	0.231			0.233			0.258		
モデル適合度	p=0.000			p=0.000			p=0.000		
N	555			548			536		

注：+：p<0.10、\*：p<0.05、\*\*：p<0.01、\*\*\*：p<0.001。

更にモデル2に課外活動参加度と課外活動参加時間を投入したモデル3では、課外活動参加度と課外活動参加時間ともに有意差がみられ、社会人基礎力スコアも依然として有意差がみられた。ここから、以上でみてきたように課外活動は社会人基礎力を媒介とした間接的な規定要因となっていると同時に、直接的な規定要因としても働いていることがわかる。この理由については課外活動のOB・OGなどを通じた内定プロセスの存在などが考えられるが、詳しくは結論で触れることにする。

## 6 結論

本稿では課外活動が「社会人基礎力」、そして内定獲得の有無に対してどのような影響を与えているのかについて、チームワーク要求型授業との比較を通して分析した。その結果、以下の点が明らかになった。

第1に、課外活動への参加、そして部・サークル活動への課外活動参加時間の長短が「社会人基礎力」の形成に対し、有意に影響を与えていることがわかった。また、チームワーク要求型授業に関しても「社会人基礎力」の形成に関して有意に影響を与えていることがわかった。そして、課外活動への参加、そして部・サークル活動への課外活動参加時間の長短については、チームワーク要求型授業や基本的な属性を統制した上でであっても「社会人基礎力」の形成に対し有意に影響を与えていることが検証された。

第2に、課外活動への参加、そして部・サークル活動への課外活動参加時間の長短が直接的に内定の獲得に対し、有意に影響を与えていることがわかった。そして、課外活動への参加、部・サークル活動への課外活動参加時間の長短について、Bグループにおいてはチームワーク要求型授業や基本的な属性を統制した上であっても内定の獲得に対し有意に影響を与えていることが検証された。

第3に、「社会人基礎力」が内定の獲得に対し、他の属性変数を統制しても有意に働くことがわかった。ある意味当然の結果ではあるものの、採用において学校歴を指標とした選抜だけでなく、同一の大学入試難易度のグループ内であっても、能力の高低による選抜が行われているということを確認したという点において有意義であると考えられる。

以上の知見をまとめると、課外活動に関しては課外活動への参加、部・サークル活動への参加時間がともに有意に「社会人基礎力」の形成、内定の獲得に対し有意であったが、チームワーク要求型の授業に関しては「社会人基礎力」に対してのみ有意な相関がみられ、内定の獲得に関しては有意な相関はみられなかった。こうした課外活動とチームワーク要求型授業の差異に関しては、①重回帰分析にみられたように、チームワーク要求型授業への参加と「社会人基礎力」との相関が擬似相関であるという可能性、②チームワーク要求型授業が「社会人基礎力」の形成に及ぼす影響が小さいため直接的な相関はみられない、③課外活動は梅崎（2004）のいうようなOBネットワークを通じた内定獲得ルートがあるため、より強く相関がみられるといった理由が考えられる。

以下に本稿における検討と示唆についてまとめる。課外活動への参加、そして部・サークル活動への課外活動参加時間が、チームワーク要求型授業を統制した上であっても「社会人基礎力」の形成に対し有意な相関がみられたということから、授業を受けるか否かにかかわらず、課外活動への参加が「社会人基礎力」の形成に対し有効であると考えられる。つまりは、近年「社会人基礎力」の形成を目的の1つとして導入されている「キャリア教育」と呼ばれるような、大学教育における授業との相乗効果や、そういった授業以上の効果が期待できると考えられる。加えて、内定獲得に対する直接的な効果に関しても期待できるといえる。

また、前に確認したように、大学入試難易度αグループとBグループについて「毎回出席をとる授業」を受けた割合について比較してみると、大学入試難易度Bグループにおいては大学側が学生の出席を取る授業を増やし、学生を授業に来させようとする傾向がうかがえた。また課外活動への参加者についても比較すると大学入試難易度Bグループでは大学入試難易度αグループに比べ少なくなっていた。こうした状況を踏まえて、本分析から得られた知見を考慮するならば、特に大学入試難易度Bグループにあたる大学ではいかに学生を授業に出席させるかに尽力するだけでなく、課外活動の活発化や参加を奨励すること、例えば大学側からサークル活動へのサポートを手厚くするといった取り組みを通して、「社会人基礎力」の形成、そして就職活動への備えをするということも有効ではないかと考えられる。

ここまで課外活動の有用性について述べてきたが、大学における授業を軽視しているわけではなく、むしろ大学の授業で得られる知識や経験との相乗効果が発揮されることでより有効なものとなるだろう。例えば、今回はチームワーク要求型授業という枠内での分析だったが、授業の形態や実践の仕方について異なった視点からの分析を行うことでより詳細に正課の授業の有用性について検証できる可能性もある。また、本田（2009）の提唱するような、職業的意義のある教育など将来的な進路を見据えた授業を行っていくことで大学教育が就職活動において

より有効な手段となり得るだろう。

最後に、本稿での課題として以下の点が挙げられる。第1に、課外活動における活動内容にまで踏み込んでいないことが挙げられる。例えば、運動系・文化系の区分や組織の人数、経験した役職などを加味した上で分析を行うことで、より効果的な課外活動への参加の在り方を提示することができるかもしれない。第2に、「社会人基礎力」の指標が適切か否かという点が挙げられる。先行研究でも同様の課題が見受けられるが、質問項目が結果的にある時点での自己評価について聞く形になってしまっているため、分析において独立変数と従属変数の因果関係が逆になってしまっている可能性が拭いきれないという問題がある。これらの課題に関しては、2時点間を比較できるような縦断的な調査が必要となると考えられる。

#### <引用文献>

- 濱中義隆、1998、「就職結果の規定要因——大学ランクと『能力自己評価』に注目して」岩内亮一・苅谷剛彦・平沢和司編『大学から職業へⅡ——就職協定廃止直後の大卒労働市場』広島大学大学教育研究センター、33-45.
- 本田由紀、2009、『教育の職業的意義——若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.
- 小杉礼子、2008、「大学生の進路選択と就職活動」『高等教育研究』11: 85-105.
- 小山治、2010、「なぜ企業の採用基準は不明確になるのか——大卒事務系総合職の面接に着目して」苅谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学——データからみる変化』東京大学出版会、199-222.
- 梅崎修、2004、「成績・クラブ活動と就職——新規大卒市場におけるOBネットワークの利用」松繁寿和編『大学教育効果の実証分析——ある国立大学卒業生たちのその後』日本評論社、29-48.